

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652174

研究課題名（和文） 後漢鏡芸術論—作家論による型式学の再検討

研究課題名（英文） Artistic Study of the Later Han Mirrors, a Reexamination of Typological Chronology on the Study of Metalworkers

研究代表者

岡村 秀典 (OKAMURA HIDENORI)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：20183246

研究成果の概要（和文）：後漢明帝（57-75）代に、「尚方」から「青蓋」が自立し、浮彫の盤龍紋をもつ獸帯鏡と盤龍鏡を創作した。章帝（75-88）代に、「杜氏」や「石氏」ら淮派は鏡の銘文と凶像とに卓越した技芸を發揮した。一方、呉派の「朱師」は西暦 83 年の紀年銘をもつ画像鏡を創作した。そこには陰陽を調和する西王母と東王公の凶像がはじめてあらわされた。和帝（88-105）のとき、淮派の名工たちは画像鏡のモチーフを受容した。たとえば「石氏」は西暦 91 年の紀年銘をもつ画像鏡を制作している。

研究成果の概要（英文）：During Ming-di's reign(57-75), *Qing-yang* who broke off from *Shang-fang* first created the motif of *Pang-long* in relief on *Shou-dai* animal-belt mirror and *Pang-long* mirror. During Zhang-di's reign(75-88), some skilled hands of the Huai school such as *Family Du* and *Family Shi* innovated in the form of changes to the mirror's inscriptions, but there are plenty of noteworthy aspects to the images of patterns as well. On the other hand, *Master Zhu* of the Wu School made a *Hua-xiang* mirror dated A.D.83 which bears the figure of Xi-wang-mu or the Queen Mother of the West together with her partner Tong-wang-gong, the Lord King of the East to conform with the rhythm of Yin and Yang. During He-di's reign(88-105), many skilled hands of the Huai School adopted the images of the *Hua-xiang* mirror, for instance, *Family Shi* made a *Hua-xiang* mirror dated A.D.91 which bears the figure of the Queen Mother of the West and the Lord King of the East.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：後漢時代、鏡、作家、銘文、凶像

1. 研究開始当初の背景

(1) 考古学の型式学は、資料の形や文様をもとに型式分類し、時空間におけるその位相を議論する。しかし、資料数が多いと数量的・機械的に類型化してしまい、各資料のもつ個性は見落とされがちである。これに対して美術史や文学の作家論は、個々の作品を鑑賞することから出発し、作家の芸術性や時代様式

に議論を展開させてゆくのがふつうである。(2) 研究代表者の岡村は、かつて型式学にもとづいて漢鏡の 7 期編年を組み立てた。その後、鏡の銘文を 1 面 1 面について解読していった結果、後 1 世紀後葉に官営工房の「尚方」から「杜氏」や「淮南龍氏」など腕利きの「名工」が独立し、盤龍鏡や獸帯鏡など市場に向けて斬新な鏡を競うように創出していった

ことを明らかにした。まだ銘文だけの分析にとどまるが、作鏡者が銘記されているという特性を最大限に生かし、従来のように類型化から出発するのではなく、美術史や文学の作家論を参考に、後漢鏡それぞれの作品を鑑賞することから出発して作鏡動向や様式を議論すべきではないかと考えた。

2. 研究の目的

- (1) 作鏡者の名が銘記された後漢鏡を対象に銘文の解説と図像文様の美術史的・作家論的研究を課題とする。作鏡者ごとに鏡の時間的変遷を検討するとともに、同時期に活躍した他の作鏡者との関係を明らかにし、作鏡動向や時代様式を考察する。
- (2) 後漢前期に「尚方」から自立した淮派のばあい、「杜氏」は盤龍鏡の制作にはじまり、浮彫式獸帯鏡や画像鏡を連作している。その創作性を評価するのが第一である。
- (3) 第二に、「杜氏」と同時に自立した鏡工に「淮南龍氏」や「呂氏」らがあり、かれらの横のつながりを検討する。
- (4) 第三に、ほぼ同じころ江南では「朱師」や「呉向里柏師」ら呉派が画像鏡を創出し、やや後れて四川では「広漢西蜀」工房が各種の神獸鏡を創作していったが、このような他地域の鏡工との関係を追求したい。
- (5) 以上の考古学的な分析が目的であるが、内藤湖南以来の東洋学では後漢時代が古代から中世への転換点であり、人びとが自我にめざめ、芸術や宗教が開花した時代と評価されていることから、このような芸術論をもって他の人文諸科学の議論に参加することを最終的な目標としたい。

3. 研究の方法

- (1) 研究代表者の岡村は所属する京都大学人文科学研究所において共同研究「中国古鏡の研究」班を組織し、中国文学や言語学、美術史の研究者らと鏡の銘文を精読してきた。その共同研究班は2011年度をもって終了したが、銘文の集成と注釈を作成し、『東方学報』にそれを公表するため、月1回のペースで研究会を開催する。
- (2) 考古学の方法では出土地情報が必要であったが、本研究では作鏡者の記されている鏡を対象にするため、出土地情報は必ずしも必要ではない。このため、日本と中国に所蔵されている公私コレクション資料を調査することによって、研究を進めることができる。そこで、中国では呉派の活動地域であった上海・浙江と、淮派の活動地域であった鄭州・徐州に焦点を絞り、調査を実施した。日本では奈良の寧楽美術館、大阪大谷大学、京都の藤井康行コレクション、磐田市埋蔵文化財センターの渡邊晁啓コレクション、東京の浦上蒼穹堂において調査した。

4. 研究成果

- (1) 紋様の分類からはじめる型式学的方法ではなく、銘文の作鏡者名を手がかりに技巧の遍歴を追跡する方法によって、後漢鏡における淮派と呉派の展開について検討した。
- (2) 後漢明帝（在位 57-75）のとき、宮廷御用品を制作する工房名の「尚方」から「青蓋」が自立した。かれらは浮彫表現の盤龍紋を創作した有志の鏡工たちで、これが淮派のはじまりである。ほぼ同じころに「三鳥」や「池氏」らも独特の浮彫式獸帯鏡を制作し、「青蓋」に追随した。章帝（在位 75-88）のときに「青蓋」は「青羊」や「三羊」などに分裂し、「陳氏」とともに「青蓋陳氏」鏡を合作するなどの再編成が進むが、いずれも青龍と白虎が対峙する盤龍紋は共通する。「淮南龍氏」も章和年間（87-88）に龍虎が対峙する盤龍鏡をつくるが、龍の表現は「青蓋」らの鏡と異なっている。80年代に「尚方」から自立した「杜氏」は、西域に由来する辟邪・天禄を一对の龍形であらわした。このように淮派では工房ごとに異なる表現の盤龍鏡を制作していたのである。また、「杜氏」らは銘文にもすぐれた才能を発揮した（図1）。



図1 「淮南龍氏」と「杜氏」の盤龍鏡

(3) 一方、建初八年（83）に「吳朱師」は西王母と東王公の神仙世界をあらわした画像鏡を創作した。吳県ではまた「吳向里栢師（栢氏）」や「吳何陽周是（氏）」らも画像鏡の制作をはじめた。その「吳向里栢氏」は「忠臣伍子胥」を主題とする吳越の故事、「周是」は韓朋の妻「貞夫」の故事を主題とするなど、それぞれに趣向をこらしたモチーフの画像鏡を制作した。画像にすぐれた才能を發揮したのが吳派であり、画像鏡において従来の四神を主とするとする瑞獣の世界から脱却したのである（図2）。



図2 「建初八年吳朱師作」と「吳何陽里周是」の画像鏡

(4) 吳派は同時に盤龍鏡の制作にも着手した。「朱師（氏）」・「栢師（栢氏）」・「周是（氏）」いずれの工房においても、画像鏡とはモチーフのまったく異なる盤龍鏡が並行して制作されたが、その龍虎表現はことごとく「青蓋」らの焼き直しにすぎなかった。また、画像鏡の榜題をのぞけば、吳派は銘文に獨創性を發揮することはほとんどなく、銘帯には樋口隆康〔1953〕分類の銘文 N を用いることが多かった。

(5) 吳派の創作した斬新な画像鏡は、淮派に衝撃を与えた。「建初八年」鏡より後れること8年、淮派の「石氏」は永元三年（91）に二神と「雲中玉昌」・白虎の凶像をもつ画像鏡を制作した（図3）。それは吳派の画像鏡に独自の銘文と紋様を加えたものであったが、やがて「石氏」は吳派の「周氏」画像鏡をほとんどそのまま模倣するようになる。「石氏」はまた、最初のうちは「尚方」や「龍氏」に近い表現の盤龍鏡を制作していたが、その盤龍紋はしだいに「青蓋」らの表現に接近していった。しかも、いずれの銘帯にも吳派と同じ樋口分類の銘文 N が用いられている。漢鏡6期には、このような吳派と淮派の交流と融合が活発になり、それが華西系において広漢派の成立をうながした。



図3 「永元三年」「石氏作」画像鏡



図4 「吳郡胡陽、張氏元公」環状乳神獸鏡

(6) 2世紀後半に華西系の環状乳神獸鏡・八鳳鏡・獸首鏡が盛行する。その後半期の180～190年代には「吳郡胡陽(里)張氏元公」が華西系の環状乳神獸鏡(図4)の模倣よりはじめ、同向式神獸鏡、つづいて重列式神獸鏡を創出していった。吳郡の郡治があった吳県は吳派の活動拠点であったが、新しい神獸鏡の創作は「張氏元公」が「吳郡胡陽」から離れて工房を新設したときにはじまった。また、それまでの吳派とは対照的に「張氏元公」は銘文にも独創性を発揮した。環状乳神獸鏡の段階から広漢派の銘文を参考に「自づから衆と異なる」四言句を創作し、同向式神獸鏡から重列式神獸鏡を生み出す過程のなかで江南系に定着する林裕己分類 Sa を創出した。

(7) 同じころ華西系の八鳳鏡が長江中下流域に伝播した。そのなかで後漢の都「雒陽」から南遷してきた「趙禹」が、「張氏元公」同向式神獸鏡に近い銘文をもつ八鳳鏡を創作し、つづいて八鳳鏡の銘文に林分類 Sd の一種を採用した。このような林分類 Sa・Sd は漢鏡7期の江南系を代表する銘文となったのである。

(8) 以上のように、淮派と吳派の成立と展開を鏡工ごとに跡づけてみると、その流派とは、これまで想定されてきたような地域割りの様式ではなく、それぞれに自立した鏡工を内包し、流派をこえた交流と融合が頻繁にくりかえされていたことによる、流動的な鏡工のまとまりとして理解すべきであろう。それは自立した鏡工たちが、ひとりの作家として自分の名を銘記した鏡を制作し、ときには他地域に移動して作鏡活動をつづけていたからにはほかならない。もちろん作者名を記さない鏡が同時につくられ、凡庸な図像や銘文の鏡もまた少なくないのであるが、芸術性をもつ鏡とそれらを等し並みにあつかう「紋切り型」の分類と系統論は、そろそろ見直す必要がありそうである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

岡村秀典、名工杜氏伝—後漢鏡を変えた匠、岡内三眞編『技術と交流の考古学』同成社、査読無、2013、42-53

岡村秀典、後漢鏡における淮派と吳派、東方学報、査読有、第87冊、2012、528-488

森下章司、華西系鏡群と五斗米道、東方学報、査読有、第87冊、2012、486-450

岡村秀典、後漢鏡銘の研究、東方学報、査読有、第86冊、2011、1-90

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/147963/1/jic086_1.pdf

森下章司、漢末・三国西晋鏡の展開、東方学報、査読有、第86冊、2011、91-138

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/147962/1/jic086_91.pdf

森下章司、三段式神仙鏡の新解釈、古文化談叢、査読有、第66集、2011、1-14

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡村 秀典 (OKAMURA HIDENORI)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号: 20183246

(2) 研究分担者

森下 章司 (MORISHITA SHOJI)

大手前大学・総合文化学部・准教授

研究者番号: 00210162

(3) 連携研究者

向井 佑介 (MUKAI YUSUKE)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号: 50452298